

# 今週のお薦めレコード



## このレコードを聴きたい

第8065番 税込み11000円



ベートーヴェン ロマンズ第1、2番  
メーリング舞曲集、コントルダンス Wo014、他  
ボスコフスキー(vn)/ウィーン・モーツァルト合奏団  
英デッカ/SXL6436/1969年録音/  
ラージ溝無し(オリジナル)/ステレオ/G

コントルダンスは男女のペアが次々と相手を交換しながら踊る群舞。この音楽をバックに踊るのも楽しい。つまり、ウィнна・ワルツの王様ボスコフスキーは踊りたくなるような雰囲気ここに作っている。おもしろいがその中に英雄交響曲のテーマも現れる。手塩にかけたアンサンブルをバックにボスコフスキーが演奏する二つのロマンスも魅力的である。それは他の曲と溶け合ってディヴェルティメントのように和やかである。ここにはベートーヴェンの強弱の激しい交替などどこにもなく、古典派のリラックスした雰囲気に包まれている。(山田)

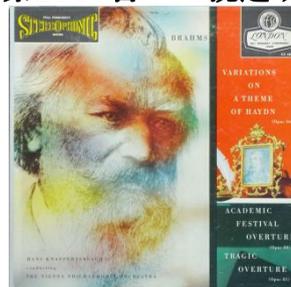
第8066番 税込み3300円



オッフエンバック パリの喜び(ロザンタール編)  
ニュー・フィルハーモニア管/ミュンシュ  
米ロンドン/SPC21011/英プレス/1966年録音/  
溝有りラージ(オリジナル)/ステレオ/G

これはキャバレー・ミュージック的な面も持った雰囲気である。もともとオッフエンバックの音楽はそうしたものであるから異論はないだろう。それをミュンシュが真面目顔で演奏しているところが面白いのだ。この編曲はソロ楽器の絡みに趣がある。諧謔味があつて心をくすぐる。全体的にはサーカスのジンタもどき部分が多く、威勢も良い。そして突然ダンディなムードが挟まれたりする。ジャケットの、うさを吹き飛ばしてくれるようなカンカンも登場する。これはデッカがオリジナルだが、プロデューサーはロンドン・レコードのダマートがやっているようだ。勿論録音スタッフはデッカだと思うのだが。(山田)

第8067番 税込み22000円



ブラームス 大学祝典序曲、悲劇的序曲、  
ハイドンの主題による変奏曲  
ウィーン・フィル/クナッパーツブッシュ  
米ロンドン/CS6030/1957年録音/ステレオ/  
英プレス・外溝フラット盤/G

SXLは発売されず、当盤がステレオ初出となります。  
これはお宝盤としても評価できるものです。ハイドンの傑作「皇帝讃歌」はベートーヴェンも「こんな音楽を書きたい」と絶賛しました。ブラームスは得意の変奏技術を駆使して、この音楽を一層高みへと引き上げたのです。名指揮者たちが挙げて演奏する中で、クナッパーツブッシュの風格ある演奏は別格と言って良いでしょう。しかも、50年代のウィーン・フィルを振っているのだから、これ以上の贅沢は言えません。クナの数少ない正規録音として是非お勧めします。(山田)

第8068番 税込み6600円



ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第18、32番  
アニー・フィッシャー(p)  
英EMI/33CX1807/1962年録音/モノラル/G  
SAX2435のモノラル・テイク盤。ステレオ・モノラル共に大変な入手難レコード。

アニー・フィッシャーの重厚な響きには、その師エルンスト・フォン・ドホナーニを感じさせます。ご存じのようにドホナーニの歴史的な録音はベートーヴェン演奏の一頂点を築いています。重い打鍵と深い思索はドイツの巨匠たちと並ぶものを感じさせます。それが、彼女のレコードを未だに求める愛好家の多い理由でしょう。エリ・ナイにも似た厳しさがありますがテクニックはアニーが上でしょう。全霊を打ち込んでいる姿が目に見えるようです。録音の少なかったことが惜しまれる女流ピアニストとしてマイラ・ヘスと並ぶでしょう。(山田)